神社の杜（十一）

ビジターセンター　所長　片柳　茂生

指名手配

事件は昨年の初夏に起こった。山の斜面に生えているヤマユリが、何者かによってあらかた根を掘られてしまったのだった。しかしこれはこれから行われる犯行のプロローグであり、その者はさらに遠大な犯行を企てていた。すなわちそれは、山の住民が丹誠込めて栽培している馬鈴薯・山芋などを盗んでしまおうというものだった。

ここで、御岳山上の畑の位置についてご説明をしておこう。神社の北方に位置する富士峰の東斜面、それに日の出山の途中にある野中と呼ばれている所、この二ケ所に畑は集中している。

犯人は、まず手始めに富士峰の畑から計画の実行に取り掛かった。ねらいは山芋。時期は山芋が育ちはじめる夏。犯行時間は当然深夜である。そして見事にこの計画は成功した。支柱に絡みついたつるを傷つけぬように注意を払い、種芋には目もくれずに若い山芋だけを選んだ手口は、この者がまさしく畑荒らしのプロであることを証明している。

耕作者たちは、現場に残された足跡から犯人が、今まで御岳山には来たことがなかったイノシシであると断定した。

平和でのどかな雰囲気だった畑の様相は一変した。畑の廻りには仰々しい柵が設けられたのだった。しかしこうした自衛手段をこうじたことによって、その後の被害を最小限にとどめることができた。

味をしめた犯人は、今年もうまい山芋にありつこうと思っていたに違いない。しかし、昨年苦い思いをした富士峰の耕作者たちはあらかじめ山芋畑に自衛策を施していた。そのため、犯人は柵のない馬鈴薯畑にねらいを変更し、なおかつ、それがおいしくなる時期になるまでの間、周辺での行動を控えた。この作戦が功を奏したのか、油断していた耕作者を後目に、難なく馬鈴薯を我が物にした。そして、すぐさま場所を富士峰より、野中の畑に移し、そこでも馬鈴薯と南瓜を手に入れることができた。

あわてた耕作者等は、進入防止の柵を作るとともに、お上に退治を願い出た。そして願いは聞き入れられ、とうとうこのイノシシは有害鳥獣という汚名のレッテルを貼られ、御岳山周辺で指名手配されるはめになってしまった。

果たしてこのイノシシの運命はどうなるのだろうか。

真夏の目覚まし時計

「ホトトギス」

御岳山上の夜あけは「テッペンカケタカ」「トッキョキョカキョク」の鳴き声で目覚める。午前四時三十分、雨が降ろうが晴れようが毎日決ったようにけたたましく鳴き出す。日本には夏鳥として渡来し、雄は夜でも空高く飛びながらなき、ウグイスやミソサザイの巣に卵を産み込み、自分では子育てをしない。

ひなは寄托鳥の卵より先にふ化し、寄托鳥の卵やひなを巣の外に落してしまい、親鳥の運んできたえさを独占して育つ、卵は他の鳥に比べて著しく小さく色も寄托鳥の卵によく似ている。

あとがき

この夏の大雨は、東日本全域に甚大な被害をもたらした。これだけの文明社会を迎えても、自然の力には抗えない偉大さがある。

また、未曾有の不況、環境問題など明るい未来が見えてこない。生活の豊かさのみ追求するのでなく、もう一度先人より受け継がれたものを見直す時機なのだろうか。

今回は、宮内御嶽講石井朋男様の「神社参拝記」ほか、石山巳代子様にも神社御神徳の玉稿をいただきありがとうございました。

今後とも、皆様のご意見、ご寄稿をお待ちしております。

平成十年九月二十九日発行
〔非売品〕
編集　武蔵御嶽神社
☎〇四六（七八）八五〇〇
印刷　㈱成和印刷